働く -work-

対談 いま働くとは

長引く不況で、先が見えないこの時代。人々は新しい働き方をどう見つけ、どう生きていけばいいのか。テレビや著書で「仕事」について発言する小山薫堂さんと、女性起業家の支援を続ける菅原智美さんが語り合った。

（司会は共同通信編集委員・緒方伸一）

「ぶれる」ことも必要だ

◇すがはら・ともみ　70年新潟市生まれ。リクルートなどを経て、07年、女性起業家の支援と貸会議室を運営する「ＮＡＴＵＬＵＣＫ」設立。全国で約500人の女性経営者が登録する会員制の「女性経営者エメラルド倶楽部」の代表理事。

菅原 智美さん

◇こやま・くんどう　64年天草市生まれ。放送作家として「料理の鉄人」「カノッサの屈辱」など。09年、米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した「おくりびと」で脚本を担当。09年から山形市の東北芸術工科大教授。近著に「幸せの仕事術」。

小山 薫堂さん

―仕事や働くことについて、日本の現状は？

小山　比較によって仕事している人が多い。「自分の仕事はあの人より良い」とか「去年より売り上げが増えた」とか、判断基準が常に外にある。原因は、常に成長を求める社会にある。マイナスを解消する姿勢があれば社会は変わると思う。

菅原　社員の不満は誰かと比べてばかり、というのが大半。給料を上げても誰かより低かったら不満だし、逆に安い給料でも自尊心だったら満足する。その原因として、夢や目標を持っていないことが挙げられる。

出会い

小山　日本人は「ぶれる」ことはいけないと見ている。が、今はぶれないと生き残れない。バスケットボールのピボットのように、軸足は今の仕事に置いて動かさず、もう片方の足は動かしながら最良のパスを出す判断をすることが求められている。

菅原　女性の起業家を支援している立場から言うと、民間調査会社のデータで女性経営者の割合が日本は9％、米国は25％、アジア各国も40％以上なので極端に少ない。

これで生きる

消費を決めるのは90％が女性だと言われているのに、女性が経営者として活躍していない。

子どもがいる女性が働きにくい状況も相変わらず。最近会った33歳の女性は、子どもを産む前は不動産の営業で数千万円も稼いでいたのに、復帰しようと30社受けて全て落ちてしまったという。

―日常から一歩踏み出す方法はあるか。

菅原　誰と付き合うかで人生は変わる。新しい人と話すと新しい情報も入ってくる。セミナーや勉強会に参加して多くの人と会えば、やりたいことが見つかると思う。

小山　「行き詰まっている人は自分のことしか考えていない。打破する方法として、自分のことを差し置いて、他人のことしか考えないで行動してみてはどうか。そこに新しい出会いが生まれる。きっかけがある。

経営者の3割を女性に

シニア世代

―お二人の働くモットーは。

小山　「僕らは幸せだ」というこの言葉が僕のベースにある。父は戦国時代なら、働くとは人命を賭けることだ、現代に生まれても、水をくむため毎朝5時間歩く国もある。仕事で失敗しても戦国時代のように殺されないんだから、好きなことをやって人生を楽しもうという思いがある。

菅原　新しいことにチャレンジするのが好きで、起業した。人から感謝され、私と会って「人生が変わった」と言われることも気が満いっぱい。愛する人から感謝され、喜ばれることをビジネスにできれば最高だ。

―これからの働き方、進むべき方向は。

菅原　日本企業は海外進出している言われるが、大手企業の工場があるだけで、中小企業はほとんど進出していない。

海外では日本人が経営しているだけでブランドになり得るので、中小企業のビジネスチャンスはいくらでもある。日本の優れた商品やサービスを持って行きたい。

小山　最近、シニア世代のことを僕は「アラウド・シェネレーション」と呼んでいる。この「アラウド・シェネ」がこれだけ上手に無駄遣いをするかが、日本をもっと元気にするポイントだ。この世代が金を楽しく使えば、日本の文化も向上すると思う。

対談する小山薫堂さん（左）と菅原智美さん

さまざまな仕事をしている人を拾い上げ、「日々どんな思いで働き、どんな喜びや苦しみがあるのか」を持つ連載「これで生きる」を1月9日から始めます。

例えば、神奈川県の大機で60歳を過ぎた女性が自宅でカフェをやっている。大通りから入った住宅街なので、家族は「誰も来ないよ」と止めたが、売り上げゼロの日がないくらい繁盛している。

ハードル

―就職難でスタートからつまずいてしまう。

菅原　待遇が良いとか正社員でなくては駄目とか、ハードルを設けているからではないか。働く人を求めている会社はたくさんあり、ハードルを設けなければ仕事は見つかるはず。何でもいいから仕事をして、まず百パーセント本気で働いてみると、いろんなチャンスが生まれてくると思う。

小山　今の学生は、確実にいいゴールが見える所しか挑戦しない傾向がある。どうなるかわからない物には手を出さない。現代の日本に生まれたことに感謝する気持ちになれば、どこでもいいから働こうという気になるのではないか。

今後、やりたいことは。

小山　大機のカフェのような店をつなぐチェーンをつくりたい。オーナーが違い、提供するものも違うが、思いだけは同じという「思いのチェーン店」をやりたいと考えている。

菅原　企業でも政治、社会でも、女性が3割を超えると、ぐんと活性化するというデータがある。日本の会社経営者の割合が女性になるよう、サポートしていきたい。